



内藤千珠子

Naito Chizuko

愛国的無関心

「見えない他者」と物語の暴力

狂熱的な愛国は
他者への無関心から生まれる

この「愛国的無関心」とも呼べる現代の風潮を、
日本独特の検閲制度に起因する感性として、
さまざまな物語からあぶりだす。
現代の出口のない閉塞感に風穴を穿つ力作。

新曜社

内藤千珠子
Naito Chizuko

愛国的無関心

「見えない他者」と物語の暴力

新曜社

はじめに

世紀が変わってからの十数年、日本や日本人という言葉の語感は大きく変化した。少し前まで、戦争という単語は日本の過去を語るものであったのに、いまでは日本の未来に起こりうる危機を告げる身近な言葉と化した。その文脈を、新しい愛国主義やナショナリズムが支えている。

論理を複雑な議論をとおして考えることよりも、イメージやわかりやすい図式が好まれるのが、いまの空気である。だからこそ、シンプルな愛国的感覚は、あたりまえで自然な感情として認識され、世の中に広く行きわたっているといえるだろう。日本人という単語に自分を預けることで自我を保とうとするメンタリテイは、日本や日本人という記号を無条件に肯定する力になる。日本人としての誇りをもって日本を愛するのは当然のことであり、自虐的な姿勢で過去を反省する時期はもう終わった、歴史に対する一般的な態度として、そのような疚しさなどはや見飽きた、という感覚が支配的になりつつある。

他方で、未来への希望をもつことは難しくなった。格差社会を背景に息苦しい閉塞感が広がり、大震災と原発事故の後には、取り返しのつかない問題から目を背けつつ、ゆるやかな絶望感がわかちもたれている。未来の方がいまよりも豊かになるという手応えがもてないため、たのしく充実し

た実感を味わうことは難しくなり、小さなことに腹を立てたり苛立ったりする瞬間が増加していく。実際、多くの人にとつて、電車のなかや公共の空間で、攻撃的な気分になる回数が増えているのではないだろうか。日常的な場面で、クレームを言い立てる人の数も激増したように感じる。不安や不満、怒り、コンプレックス、嫉妬から、不愉快な感触が醸成され、ストレスをコントロールしにくい心理状態が社会の標準となつている。

不快な感触をリセットするために、現在の日本社会にみられる現象こそが、バッシングにはかならない。大勢が攻撃することが予測される対象や出来事が現われたとき、皆と一緒に攻撃を加える。自分には批判が直接返つてこないことがわかつているものに対してのバッシングに参加することで、負の感情が解消されるばかりか、集団に身をゆだねることで安心感が得られる。そうやって心のバランスを保つことができるというわけだ。したがって、バッシングの対象は実際のところ、誰であつても何であつてもかまわない。

誰でもいい誰かに向けられた攻撃的な暴力は、愛国的なナショナリズムに転じて、日本社会の全体を覆つている。とりわけ「韓国」「北朝鮮」「中国」「在日」といった記号に際だつた暴力が向けられていることは、バッシングすることに論理的な根拠があるかにも見えるという点に起因しているのだらう。それは、誰もが自然にもつてはいるはずの、愛国的な感覚に支えられたナショナリズムを根拠とする意見の表明である。時として行きすぎた暴力になり、自分としては過剰な暴力を容認するわけではないが、基本的にその考えは間違つているわけではない。攻撃する集団の一部になれば、日本人である自分の自我を支えることができ、不満や不安などの否定的な感触を忘れ、結果と

して自分を肯定することができる。このように要約できる漠然とした意識を、多くの人が共有しているといえそうだ。

こうした現在の愛国的空気は、かつての帝国主義やナショナリズムの形式とは異なり、思想や論理を欠いた感情の表出のようにもみえる。学術的に分析したり、論理的に検証することのできない、あるいは、そうするまでもなく明らかな気分やイメージだと、いえばいえるだろう。

だが、私には、この愛国的空気が、近代の帝国主義が日本語のなかに形成した無関心の回路をベースに、日本語を使用する人々の無意識を呪縛しているように思われる。なぜなら、バッシングのな攻撃をする側は、「韓国」「北朝鮮」「中国」「在日」をイメージ上の存在としてしか見ておらず、具体的な他者に対する関心や興味を欠いているからだ。愛国的な気分で同化した「わたしたち」は、「韓国」「北朝鮮」「中国」「在日」の内実を、自分が向き合った具体的な誰かや何かとして見るわけではない。

すなわち、それらは任意の記号であり、容易にほかの対象と入れ替わりうる。負の感情が解消できるなら、バッシングの対象は何であつてもかまわない。

その感觸の根底には、他者に対する無関心、さらには自分が置かれた社会的、歴史的、政治的な構造に対する無関心がある。そしてこの無関心は、実のところ、見たくないもの、知らなくてもすむものを見ないで避ける行為を許容するという、近代日本の言説の形式によって、日本語のなかに網の目状に広がり続けているのである。

本書は、現在の愛国的空気が、近代日本の帝国主義に基づく無関心に起因しているという観点か

ら「愛国的無関心」というタイトルを掲げ、そのしくみを解き明かすことを目的として書かれたものである。具体的には、近代天皇制の権力構造を背景とした大日本帝国の検閲システムや物語の形式を手がかりに、現代と近代を行き来しつつ、帝国主義とジェンダーとの関わりから、日本語という言語のなかに構成された論理と、愛国的無関心の構造について考察する。

時代としては、一九一〇年代から現在というこの百年の間を考察の射程に、また、分析対象としては、メディアの言語、小説テクスト、映画などを取り上げて議論を進めていく。過去から現在に向かう時間の流れを通時的に記述するのではなく、現在と過去のある一点を対照させることによって、現代の論理を下支えしている言説の構造を可視化することを意図している。

第一部「検閲と帝国」では、近代日本の検閲システムのなかに現われた「伏字」という制度をにらみつつ、現在の愛国言説をベースで支えている論理について明らかにしたい。そして第二部「物語の制度」では、「伏字的死角」について、制度としての物語を考察する観点から議論していく。

「伏字」とは、そのまま活字にしたなら発行が禁止されるかもしれない、危なさを含んだ文章の一部を、出版する側が自主的に○や×などの記号に置き換えて伏せるといふ、近代日本に特有の自己検閲のシステムである。重要なのは、○や×を含んだ文章が活字になったとき、それが読めない空白を含んだ記号の集積体、死角を備えたテクストとなることだ。伏字は、ただの空白ではなく、もともと存在していた、対応すべき記号を備えた空白の場所である。より厳密にいうと、空白のようであって実はそうではなく、見えなくされた意味があることを表示する記号の場所を作るのが、伏字の役割である。

本書ではそれを「伏字的死角」と呼び、そのような死角を含んだ言説の論理こそが、近代の日本語の基層にあつて他者に対する無関心を形成していることを明らかにしていく。検閲システムとしての伏字はすでに存在しないが、伏字という表現形式は、現在の日本語表現のなかに残っている。それはつまり、伏字の論理が現在に至るまで延命していることを意味しているだろう。

愛国的無関心は、他者に向けられた暴力にもなりうるが、実のところ、自分自身を傷つけるふるまいにも通じている。だが、それが死角によつて形成されたものであるがゆえに、自分を損なう可能性が自分からは見えにくいという、逆説的な状況が継続しているのではないだろうか。こうした問いを念頭に、以下、帝国主義とジェンダーの過去と現在について思考していきたい。

愛国的無関心——「見えない他者」と物語の暴力*目次

はじめに 3

第一部 帝国と検閲

第一章 愛国とジエンダー……………16

- 1 生きにくさと暴力——ネット右翼と排外主義 16
- 2 快樂としての愛国 18
- 3 愛国の物語とジエンダー——従軍慰安婦問題と「真の被害者」 23
- 4 無関心の論理 27
- 5 仮想現実を語る「私」 29
- 6 他者の傷がもつ温度 34

第二章 伏字のなかのヒロイン……………40

- 1 政治的な禁止、性的な禁止 40
- 2 「日本主義」のファッショ化——『改造』と『中央公論』 45
- 3 移民女性と「目に見えない懲罰」 52
- 4 消される文字、消える女たち 58
- 5 伏字の記憶 64

第三章 叛逆の想像力……………67

- 1 過去に出会う場所 67
- 2 『アナーキー・イン・ザ・J P』の差別 68
- 3 脱色される政治性 74
- 4 「アンチ雅子」と「眞子様萌え」 77
- 5 皇室スキャンダルの表と裏 80
- 6 瀬戸内寂聴と大逆事件 82
- 7 美の定型をずらす 86

第四章 天皇制と暗殺……………92

- 1 反復するスキャンダル 92
- 2 大逆事件と天皇の死 93
- 3 日蔭茶屋事件と伊藤野枝・大杉栄の虐殺報道 95
- 4 大逆事件と夏目漱石 100
- 5 回避される即位礼大典 105
- 6 『神と人との間』 109
- 7 伏字的死角の罨 114

第二部 物語の制度

第五章 ヒロインを降りる……………118

- 1 政治的なヒロインの系譜 118
- 2 『エロス+虐殺』 119
- 3 天皇制と「母の母の母」 124
- 4 暗殺する女 127
- 5 ヒロインの条件 130
- 6 革命の物語への異和 132

第六章 帝国とファム・ファタール……………136

- 1 女の二つの顔 136
- 2 混血のイメージ 137
- 3 身体のトラブルとオリエンタリズム 141
- 4 不潔な白 144
- 5 帝国主義の背理 148

第七章 帝国の養女……………153

- 1 帝国主義と死角 153

第八章

壊れた物語……

- 1 物語の不在 171
 - 2 抵抗が無効化した世界 173
 - 3 男たちの絆 176
 - 4 平凡なファム・ファタール 179
 - 5 死んだ母と「水の女」 181
 - 6 欲望と規範 187
 - 7 見ないこと／見えないこと 191
- 2 博覧会と消費する視線 155
 - 3 視界を曇らせるもの 159
 - 4 帝国主義と養子 164
 - 5 帝国の養女としてのヒロイン 168

171

終章

朝鮮と在日……

- 1 「朝鮮人」の語感 194
 - 2 日本語と在日文学 197
 - 3 ファム・ファタールの悪意 199
 - 4 普通の結婚と「唯一の脱出策」 201
- 1 朝鮮と在日…… 194

194

注
208

あとがき
241

事項索引
251

人名索引
255

装幀——難波園子

資料の引用に際しては、書名・作品名、新聞・雑誌名は「」に、新聞・雑誌記事のタイトルは「」に統一した。また、註を補う場合は「」で括って示し、引用文中のルビ・圈点などは適宜省略した。

第一部 帝国と検閲

第一章 愛国とジェンダー

1 生きにくさと暴力——ネット右翼と排外主義

現在の空気を象徴する「愛国」は、そこはかたくない共感や同意によって想像された絆をつなぎながら、その絆からはみだした他者に対して、厳しい暴力を振り向ける。誰かに向かう強力な攻撃性の裏には、誰にも向かわない乾いた無関心がはりついているように見える。愛国的な空気は、いったいどのような論理によって組成され、いかなる物語と結びついて、社会的な感性を醸成しているのだろうか。

ヘイトスピーチなどの憎悪煽動行為に言及する論者は、それが在特会（在日特権を許さない市民の会）に限定された現象ではなく、日本社会の全体を覆う空気にはかならないことを口々に指摘している。たとえば師岡康子は、ヘイトスピーチの下地には日本政府の歴史的な姿勢があるとし、「排外主義デモをやっている人たちはどのような人たちなのかとの問いは、彼らは自分とは違う特異な人たちだということを前提にしている。しかし、彼らは政府の排外性を反映した日本社会の一部で

あり、その醜さを露骨に表現しているにすぎない」と述べる^②。在特会による京都朝鮮学校襲撃事件を取材した中村一成は、「何より脅威だったのは、右肩上がりが増えていくフォロワーと、サイバースペースを飛び出したデモ参加者が数倍になった事実だった。自らの「正義」に陶醉し、人を傷つけ、蔑むことに心底からの快楽を覚える者たちの裾野は広がっていた。「在特会的なるもの」はここまで日本社会の隅々にまで浸透していたのである」と危惧を表明している^③。また、森達也は、日本社会全体の「集団化」が進んでいることを述べた上で、「問題は在特会そのものだけではなく、彼らを醸成する今のこの国の雰囲気だ」と言明する^④。

加えて、現在の排外主義がインターネットというメディアと密接に関連しているという指摘も多く、野間易通の言うように、在特会的なものの特徴は「ネット上の言語感覚を街頭にそのまま持ちだしたこと」にあるといつてよいだろう。そもそもその出発点として、匿名掲示板サイト2ちゃんねるにはオープン直後から「人権問題」という掲示板があり、そこではあからさまに差別的な発言が容認されていた^⑤。そうした構造の延長で、現在でも、ネット空間は差別的な感性に下支えされている。インターネットが人々の感性を再編していくありようを分析した村上裕一は、ネット時代の新しい中間大衆を「フロート」と呼んでいる。

むしろ、ここで解き明かしたいのは、ネトウヨという言葉が暗に指し示すフロートの存在と、その背景となる環境や条件のほうです。改めて確認しますと、フロートとは、強いアイデアロギーを持たないネット時代の新中間大衆であり、それゆえに情動的に大きく左右に揺れ動い

てしまう「浮動的」な人々のことでした。フロートは、ここではネットウヨの前段階の存在として現れてきます。
（『ネットウヨ化する日本』）

スマートフォンが普及した現在では、情報を主としてネットから取得することになるが、その際、人々は2ちゃんねるから情報を抽出した「まとめサイト」やネットニュースに日常的に触れる。実のところ、まとめサイトやネットニュースは右翼的な論調がベースとなっているが、「フロート」はそれを知らずに自然なものとして情報を受容してしまうため、容易にネット右翼に流入しうる存在にはかならないというわけだ。⁶つまり、ネット空間を浮動することは、排外的な感性を内面化した「わたしたち」を大量生産する過程と化すのである。

現況の基本的な構造を大きくまとめるなら、第一に、同調圧力を背景に集団化が進行した社会において、在特会的なるものの暴力は、ネットを背景に標準化されスタンダードとなっているという事態があり、第二には、インターネットに内在された右翼的な傾きが、それと意識されないままに排外主義的なコードを共有する絆を生成している様相が見いだされる。排外主義の現在形は、閉じられたネット空間において、新たな集団的感性を生み出しているが、そこでは、差別的な物語が現実と地続きになって、現実の空気を更新していくのだ。⁷

2 快楽としての愛国

では、排外的な傾きを帯びた愛国言説は、具体的にどのような論理をもっているのだろうか。

まず、ネット右翼、あるいは保守系論客として発言する書き手や活動者の主張に共通する第一の論理は、「ネットで目覚めた」という「覚醒」の感覚である。右派の論客である古谷経衡は「ネットで目覚めました」という言い方をする人は実に多いですよ」と語るが、「目覚める」⁸「覚醒する」といった単語は、愛国言説におけるキーワードである。女性ブロガーのYOKOは、自著のなかで「覚醒」の言葉を繰り返し用いながら、愛国的な活動をするようになったきっかけについて、次のように叙述する。

その後、2012年に人生の流れが変わることになりました。中国による尖閣問題や、韓国による竹島問題を通して、ある日、自分が生きている社会の実態が自分の思っていたものと違うことにハッと気付いたのです。以前から勘付いていたマスコミのおかしさともリンクする部分がありました。⁹

（『超人気ブロガー Random YOKO の新・愛国論』）

彼女の「ハッと気付いた」瞬間こそ、覚醒という物語を象徴しているのだが、それが歴史認識が逆転したことを意味している点に留意しておきたい。一方、自ら愛国運動を実践する佐波優子は、愛国的な活動をする女性たち取材した『女子と愛国』において、逆転の体験が何人もの女性たちにわかちもたれていることを記している。